

溶ける建築

縮小社会に突入して、暮らしは常にミニマムである。今は2世帯で暮らす、将来、大きな家は夫婦2人では持て余す。土の可塑性と木造の可変性、そしてコンクリートの永続性を利用して、RCコアBOXを中心に、木造土壁フレームがそれを覆うことで、室へと開きながら家族が集まる。将来は土壁を溶かし、減築できる家です。



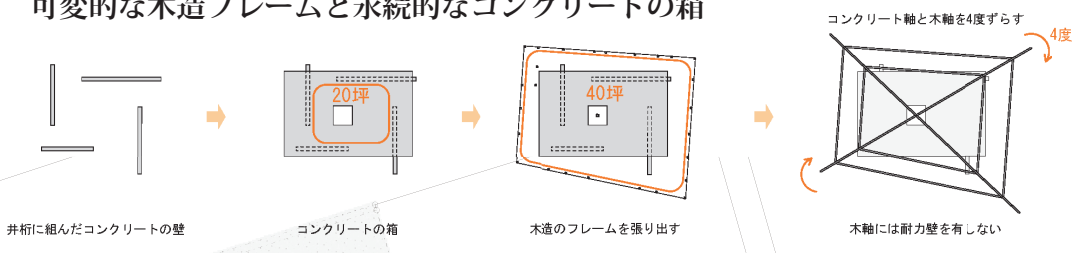
大野町のまちなみ

最初は2世帯で暮らし、将来はコンパクトに、ちょうどいい暮らしとは

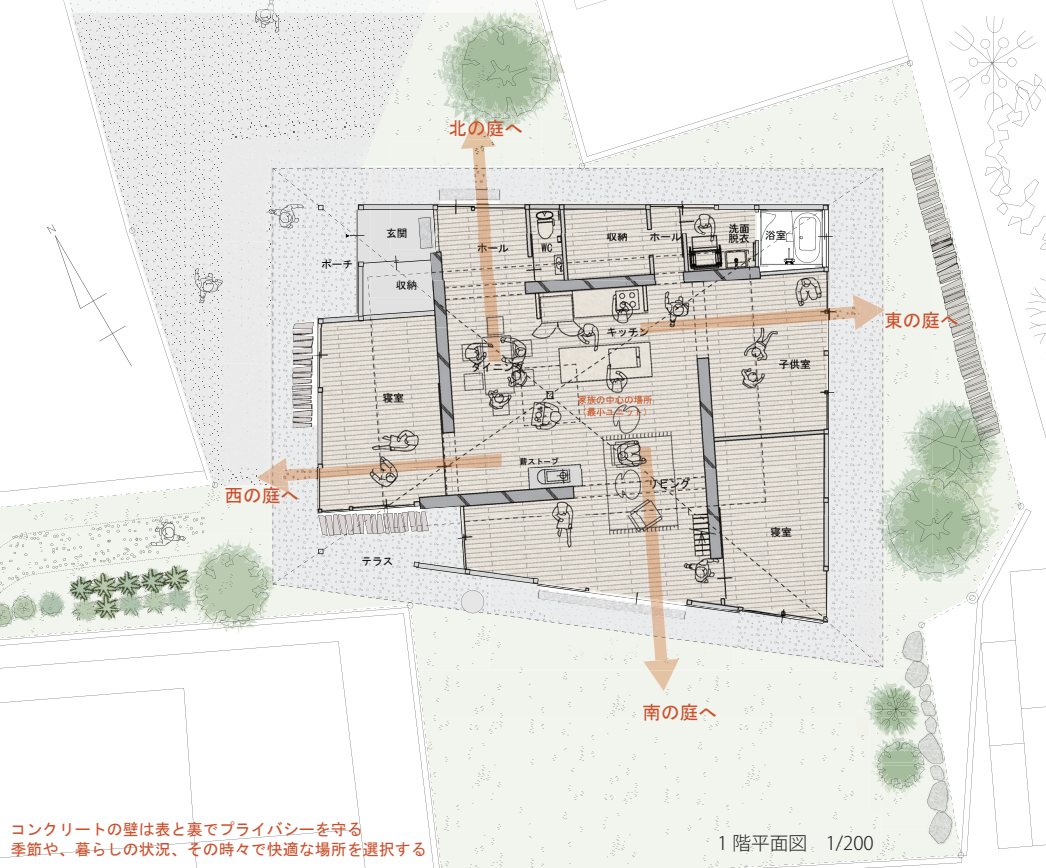
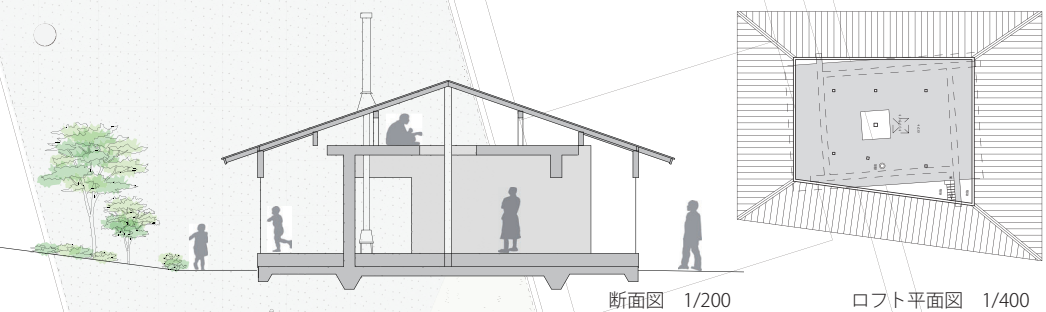
この先は営みが不確かな時代であるに違いなく、暮らし方はシンプルで小さくしていきたい、大きな家はほらないというのが要望であった。また、ここは海岸から近く1mほどの津波の影響があることを施主は知っていた。



可変的な木造フレームと永続的なコンクリートの箱



2世帯で暮らすには少なくとも40坪程度必要だが、夫婦2人であれば20坪程度で十分暮らせる。将来の減築を想定して、家の中心に約20坪のコンクリートの箱を配置した。その箱を覆うように木造のフレームを周辺に張り出すよう配置した。外力はコンクリートが負担することで、木軸は耐力壁が不要となる。コンクリートの箱は、家族の中心の場所である。将来の夫婦2人で暮らす最小ユニットでもある。井桁状のコンクリート壁を少しずらすことで4つのスリットが生まれ、このスリットから室を通して、外へとつながる。みんなが中心に集まる時には、意識的に室を開くことで、コンクリートの箱でも閉ざされることなく、快適に過ごすことができる。

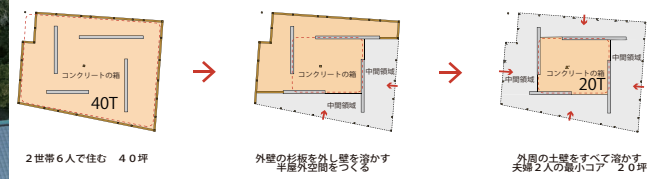


コンクリートの壁は表と裏でプライバシーを守る
季節や、暮らしの状況、その時々で快適な場所を選択する



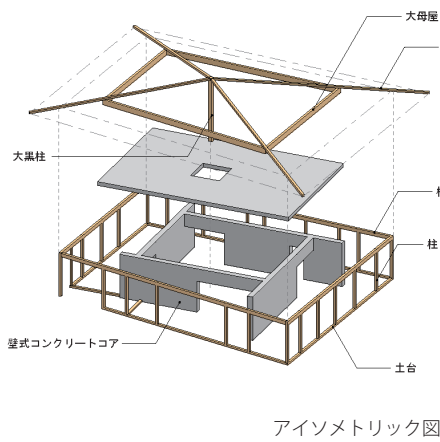
溶ける壁（土壁の減築システム）

コンクリートの箱の外側の木造フレームは、構造的制約が少ないため、将来どの部分も減築しやすい。例えば、外壁の焼杉の板を外しておくことで、大野町周辺の溶けている建築のように、雨風で土壁は溶けて落ちていく。そこには、大きな軒と竹小舞だけが残った半屋外空間が出来上がる。家の内と外の関係を可変できる仕組みは、住み手にとって、常にミニマムに暮らしていける喜びがある。将来また家族が増えるようであれば、そこに溶けた土を練り直し、壁として造ることで、内側の空間を手に入れることができる。



井桁に組み込まれたコンクリートの箱

—可変性と開放性を有する壁式鉄筋コンクリートコア—



本建築の構造計画を行うにあたり、計画上「津波にも耐える頑固なコンクリート造」と「可変性が高く、開放的な木造の要素」を要求された。これらの要求を満たす為、4枚の壁要素を井桁に配置した壁式鉄筋コンクリート構造のコアを中央に配置し、鉛直力のみを支える木造の架構をコアのスラブにアンカーする構造とした。木造部分は水平力から解放される為、耐力壁が無い開放的でシームレスな空間を実現し、自由に増改築可能となっている。コアと木部材は、それぞれの通芯がずれていることから、コアのスラブの上に大母屋が載ることによって鉛直力を伝達し、水平力もスラブにアンカーすることによってスラブを介して耐力壁に応力を伝達している。象徴的な中央の柱は、屋根の頂点を支える高軸力の大黒柱で、これはスラブを介することなく基礎に直接応力を伝達させている。

